

教育実習を終えて

日本語日本文学科 4 回生

谷 本 夏々実

私は香川県にある母校の中学校で 2 週間の教育実習を行いました。今年は新型コロナウイルスの影響で、実習期間が 3 週間から 2 週間と短くなり、例年 6 月に行っていた教育実習が 9 月に延期になりました。例年とは異なった環境の中での私の教育実習は、沢山の先生方や子どもたちに助けられ、何とか最後の日まで走り切ることが出来ました。

教育実習を終えた今、やはり 3 週間したかったという思いが強く残っています。それは、教育実習が私にとって有意義な時間となり、かけがえのない宝物となっているからです。今回は実習中の様々な経験、思い出から 2 つのことを述べたいと思います。

まず、指導の先生方との関わりについてです。指導の先生は国語と道徳で二人いらっしゃいました。国語の先生は、私の拙い指導案を何度も見てくれ、細部まで指導してくれました。「こんな授業も面白いと思う」や「こんな活動も思いついたよ」と様々な意見をくださり、私の指導案作りに協力して下さいました。道徳の先生（且つ学級の担任の先生）は私のことを非常に気にかけてくれ、生徒との繋がりをたくさん作ってくれました。また、道徳の研究授業が上手くいかず、先生の前で悔し涙を流した時に一緒に涙を流してくれ、「あなたは必ずいい先生になる」と励ましてくれました。自分の知識不足や指導力のなさ、視野の狭さを痛感した研究授業でしたが、何とか乗り越えられたのは先生方のおかげであると心から思います。

次に、実習中の力の源となった生徒たちとの関わりについてです。生徒たちは本当に可愛かったです。緊張しながらも質問を友達と考えて話しかけてくれる男の子や、やりとり帳での私のコメントを楽しみにしてくれる女の子など、温かい心を持った愛らしい生徒ばかりでした。特に心に残っているのは、実習後に日誌を取りに学校へ行き、久しぶりに生徒たちと会った時に、「先生になったらこの学校に来てください」と言ってくれる子たちがいたことです。部活動で関わった生徒たちも「先生がコーチになってほしい」と言ってくれ、私の存在を受け入れてくれた上に、もう一度会うことを楽しみにしてくれている生徒たちがいることがとても嬉しかったです。先生という仕事の 9 割がしんどく、辛いものだったとしても、1 割の生徒の言葉や思いで頑張ろうと思える、という先生方の言葉が今は少し分かる気がしています。

教材研究をどれだけやっても授業ができるほどの深堀はできなかつたし、日々時間に追われ体力も精神もボロボロになつたし、先生のどこが楽しいのか分からなくなつたし、控室から一步も出たくなくなつたし、2 週間の教育実習は相当大変でした。でも、もっと子どもたちと関わってどんな未来を歩むのか見てみたい、先生として子どもたちに色々な事を教えたい、というちっぽけな願望が生まれたので、来年から先生として踏ん張ってみようと思います。

教育実習を終えて

英語英米文学科 4回生

宇野光香

今年は、コロナ禍という非常事態に見舞われた。その為、5月末から6月上旬にかけて実習に行く予定であったが急遽取りやめになり、いつ再開されるかわからないまま数か月が過ぎた。8月下旬、ようやく母校から教育実習の受け入れ再開の連絡を受けた。とは言え、コロナ禍という状況に変わりはない。このような状況の中、私を受け入れてくださった母校の中学校に感謝の念でいっぱいである。また、私自身もコロナに感染する事なく、無事終える事ができたのも、校長先生はじめ、多くの先生方が私達実習生の体調に関し、きめ細やかなご配慮をいただいたおかげである。何と云ってお礼を申し上げたら良いのか、感謝の言葉がみつからない。今、このような思いで胸がいっぱいである。

実習を終え、わずか3週間という短期間ではあったが、多くの事を学んだ。中でも印象に残ったのは、3つの学びである。1つ目は「生徒を知る大切さと難しさ」、2つ目は「あらゆる場面での生徒指導」、3つ目は「教師だけでは授業は成立しない」の3点である。

先ず、最も重要な事は、「生徒を知る」という事である。これは当たり前の事だが、これがなかなか難しい。また、生徒自身も教師を鋭く観察し、とても的確に見抜く。非常に純粋な目で教師を見ており、小手先の事では騙せない。教師も誠心誠意向き合わない生徒の信頼を得る事は不可能である。

次に、あらゆる場面で生徒指導が行われているという事である。それは、特別な機会だけではなく教科指導の中でも行われている。私の担当教科は英語であるが、担当教員の先生は、英語の授業を行うだけでなく、英語の授業中でも生徒指導をされていた。テスト返却する授業を参観した際の事である。先生は生徒に向かって「先生は取って答案のコピーはとらないから。だからと言って、不正をはいけませんよ。」と繰り返し仰っていた。大学の講義でも、生徒指導はあらゆる場面で行うと学んだが、これも生徒指導の1つと言えるのではないだろうか。授業後、担当の先生と話をさせていただいた。先生は、授業中、生徒同士が喧嘩をした場合なども生徒指導を行うと仰っていた。

最後に、授業は教師だけでは成立しないと言う事である。かつては、ほとんどの英語の授業が伝統的教授法で授業が行われていたため、生徒が聞いていようが関係なく教師が一方的に授業を進めていくことができた。しかし、現在、アクティブラーニングが取り入れられたため、生徒が積極的に授業に参加して、はじめて授業が成立する。いくら授業が上手くても、生徒が参加してくれなければ成立しない。更に言えば、いくら下手な授業でも生徒の協力があれば、いい授業にもなる。経験のない教育実習生の授業が成り立つのも、生徒の協力のお陰である。これも今回教育実習に行き、自身の経験から学んだことである。私が授業を行う前、生徒が私に「先生頑張って」と声をかけてくれ、「俺に任せとけ」と言ってくれる子もいた。皆、私の授業に一所懸命参加してくれた。挙手をしてくれたり、音読を大きな声で読んでくれたりした。生徒みんなの優しさに心が温まる思いである。最後の研究授業は、クラス全員が授業に積極的

に参加してくれ、更に担当教諭、担任の先生、英語教科の先生方が机間指導の補佐をしてください、無事終える事ができた。生徒全員、そして先生方の優しさに包まれた50分間は生涯忘れる事ができない感動的な授業であった。

これら3つの学びは、教育実習に行かなければ、到底学べない事ばかりである。今後に生かしていきたい。また、大学で学んだことが、実際の教育現場で体験することにより更に明確となった。百聞は一見に如かずとはまさにこのことである。コロナ禍で一時は、中止になると思われていた教育実習であるが、大勢の方々の温かい支援により可能となった。私達教育実習生を受け入れてくださった母校に、改めて感謝を述べたい。

教育実習を終えて

神戸国際教養学科 4回生

岡本尚子

9月28日から10月16日までの3週間、私は母校の中学校で教育実習させていただきました。私は、教育実習に行く前、自分が生徒に教えることができるのかとても不安でした。しかし、焦らずおごらず、今その瞬間自分にできることを考えて行動することを目標に教育実習に臨みました。

1週間は様々な先生方の授業見学をさせていただきました。また、木曜日に体育大会があるということで、練習風景の見学もさせていただきました。生徒たちとは、限られた時間しか会えず、どうやって仲良くなるか悩みましたが、体育大会の練習風景や生徒一人ひとりの頑張る姿を見て、それを基に「体育大会のあの競技で、〇〇さんこんな風に活躍していたね」と具体的に褒めたり、声をかけるようにしました。その結果、生徒との心の距離がぐっと近づき、徐々に生徒と打ち解けることができました。

2週間目から本格的に授業をさせていただきました。私は、3年生の英語の授業を2回×2クラス分の計4回担当しました。授業づくりをするときは、担当教諭の先生の授業をベースに考え、どうすればより生徒たちが英語に興味を持ってくれるか意識して作りました。しかし、実際に2つのクラスで授業をしてみるとクラスが持つ雰囲気が全く違い、それぞれ反応のある場面も違うということに気づきました。このことから先生方は日頃からクラスにあった質問の仕方や授業をされているということに気づき、先生方の影の努力に気づかされました。しっかり事前に計画できたと自分で思っていたも、生徒の反応が思っていたのと違っていたり、予測していなかった事態が起こるなど、それに応じてうまく対応ができませんでした。また、生徒の理解にかかわらず、一方的に授業をすすめてしまったという点も反省点として挙げられます。研究授業でも、様々な先生方から端から端までの目配り、話す時の間の取り方など、生徒に訴えかけるように話すことを意識するようにと、ご指導いただきました。今まで、大学の授業でプレゼンテーションをするときは、「自分の伝えたいことを一方的にただ言う」ということのみを考え、「聞く人（聞き手側）」のことを考えていませんでした。これらの授業実習を通して、「誰かに聞いてもらえるように話す」ということを意識するようになりました。どうすれば聞き手にとってわかりやすいか、聞き手のことを考えながら話すことの重要性を学びました。

実習を通して、自分が生徒の時には、見えなかった先生方のたくさんの影の努力を間近で見ることができました。先生方のそれぞれ得意とされる部分や性格などの個性がチームワークとなり、様々な生徒に対して、寄り添えているということを知り、改めて教師の素晴らしさと大変さを感じました。私自身教師になった際には、どんな時でも生徒一人ひとりに対する深い愛情を持ち、寄り添っていきたいです。また、教育実習でお世話になった先生方や生徒たちへの感謝を忘れず、実習での反省点を踏まえ今後改善していけるよう、日々自己研鑽に励んでいきます。

教育実習を終えて

史学科 4回生

加藤 優和

私は8月31日から9月19日までの3週間、母校の私立高校で教育実習をさせていただきました。コロナ禍という例年とは大きく異なった状況にも関わらず、先生方や生徒の皆さんに迎え入れていただき、とても有意義な実習を行うことが出来ました。

当初は6月から実習が始まる予定でしたが、コロナウイルスにより延期が発表された時は、本当に実習が出来るのかとても心配していました。他の実習生は期間が短くなった人もいた中で3週間の実習を行ってもらえたのは、とても有難いことだったと思っています。

私は日本史を専攻していますが、今回は世界史Aを担当させて頂きました。現場では珍しいことですが、実習の中で経験させて頂けたのはとても貴重だったと思っています。教育実習の1週間前に事前指導をして頂いた際に、世界史を担当させて頂くことを知り、教科書や用語集を中心に教材研究をしました。「専門ではない」というのは言い訳にならないと分かっていたので、すきま時間なども利用しながら、授業内容の勉強や授業の展開などを一生懸命考えていました。その結果、私の中では拙いながらも、良いものが出来たと思っています。しかし、それは頭の中だけの話でした。いざ、模擬授業をしてみると、言葉の意味や事柄の背景など質問されても上手く説明をすることが出来ませんでした。この出来事から、言葉で説明出来なければ、教材研究をしたとは言えないのだと痛感しました。

多くの先生が授業を見に来て下さりました。その際に頂いたフィードバックの中で、『この教科書ならば、時代ごとに並び替えてみてはどうか』と1人の先生は仰っていました。それに対して『見開きで教科書の単元が構成されている。この項目がここに配置されている意味を考えることも教材研究である。』と仰っていた先生もいらっしゃいました。このことから、先生一人ひとりが異なった考え方をしておられることを感じました。

校舎の建て替えを行い、全ての教室にプロジェクターが設置されたことによって、ICTを活用した授業が多いと感じました。今後はどんどん増えていく形式なので、実習の中で様々な活用方法を見学することが出来たのは、良かったと思います。また中学校の方は、生徒全員がタブレットを所有しているという状況で行なわれる授業も見学させて頂きました。英語の授業では、綴りが分からないものをその場で調べている生徒もいました。また数学の授業では、グラフに書き込む際に、チョークよりも色を分けることが出来るので、板書が分かりやすくなっていました。しかし、全員がタブレットを活用出来ているわけではないですし、色分けをしすぎると、ノートに書き写す場合は混乱を招くこともあるなど感じました。加減を学ぶことが必要だと思いました。

このような経験を通して、「教師は学びを止めてはいけない」と指導して下さった先生の言葉の意味を知ることが出来ました。今後の社会人生活の糧となる実習だったと思います。

教育実習を終えて

教育学科 3 回生

小 田 瑞 稀

教育実習が始まる前は、「子どもたちと仲良くなれるか」「授業をうまくできるか」などたくさん不安がありました。しかし、教育実習が始まると、子どもたちの日々の成長や、頑張っている姿に嬉しさ、教師としてのやりがい、子どもたちと関わることができる楽しさを感じるとても充実した4週間でした。そのような4週間の教育実習を通して特に2つのことが印象に残っています。

1 つ目は、スポーツフェスティバルです。新型コロナウイルスの影響で例年通りの運動会ができない中、できる限りのことをしようと子どもたちのためにチームとなり懸命に準備されているのを見て、先生という職業はいいなと改めて思いました。子どもたちは、少ない練習時間の中で、授業中だけでなく、休み時間も練習し、授業中に積極的に友達と行進の動きを確認していました。集団行動とダンスの演技があり、みんなで一つの演技を作り上げるために、立ち姿一つ、行進の手の角度一つ、こだわって一生懸命練習している姿にとても感動しました。スポーツフェスティバルが終わった後も、朝会での立ち姿、行進の手の動きなどはどんどん洗練されていきました。スポーツフェスティバルの練習から始まった子どもたちの成長を1か月間、1番近くで見ることができ忘れられないものとなりました。

2 つ目は、隣のクラスでも授業をさせていただいたことです。実習校は、教科担任制となっていました。私がさせていただいた授業と同じところを隣のクラスで担当の先生がされており、勉強させていただいたり、隣のクラスでも授業をさせていただいたりしました。1回目で行った授業で、児童の興味にうまくかみ合い盛り上がったため、隣のクラスでも同じようにしてもうまくかみ合わず盛り上がらなかったり、片方のクラスでは伝わったのにもう一方のクラスではうまく伝わらなかったりと、万人に通じる授業はないのだと実感しました。目の前の子どもたちを見て、ひとりひとりの子ども、クラスの雰囲気にあった授業を考え続けなければならないと思いました。

また、実習校の先生方は、児童の生活に基づいた想像しやすい授業をすることを意識されていました。歴史の授業は、どこか遠い出来事で感情移入できなかった子どもたちが、担任の先生が歴史上の人物になりきり、自分たちの生活に置き換えて伝えた途端、楽しそうに学ぶようになった姿を見て、教師側が全力で楽しみ、子どもたちの生活に基づいた授業をすることの大切さを身に染みて学ぶことができました。

今年は、コロナ禍で小学校が大変な状況の中、4週間受け入れてくださったこと、私にたくさん経験を大切にしたいと少しでも多くこどもの前に立つ機会を与えてくださった先生方、6年生の仲間に入れてくれた子どもたち、たくさんの人との縁に恵まれ、感謝してもきれない教育実習でした。教育実習で学んだことを活かし、夢や目標に向かって頑張ります。

教育実習を終えて

教育学科 3 回生

中 野 実 菜

今年は、大学の授業が全てオンラインで友達や先生にも会えず、急遽実習校も変わり、何もかもが1年前に思い描いていた教育実習と違って、実習が始まる前はとても不安でした。しかし4週間の教育実習の中で、その不安を取り除いてくれるような素敵な出会いがあり、たくさんのごことを経験させていただきました。

素敵な出会い1つ目、担当教員との出会い。いろいろな先生方の授業を見させていただきましたが、特に担当の先生の授業には、毎授業様々な発見や感動がありました。児童を惹きつける“間”や口調、トーン、授業構成、視覚的な工夫など、自分の授業に取り入れたい要素がたくさんありました。実習中に見様見真似でいくつか取り入れてみましたが、工夫するのとしなまいのとでは児童の食いつきが全く違い、とても感動しました。また、担当の先生は授業の中で「演じる」のが上手く、その「ひとくだけ」が随時児童の視線を集めているように感じました。私自身「演じる」のが苦手で、最初のころは45分間ずっと同じテンポで単調な授業をしがちだったのですが、実習中にたくさんの方のアドバイスをいただき、最終日の算数の授業では少し「演じる」ことができ、児童と一緒に授業を楽しむことができました。

2つ目、クラスの児童との出会い。元気な子、おとなしい子、じっとしているのが苦手ですぐに動いてしまう子、一人でいるのが好きな子など、十人十色の個性を持つ児童ばかりだったのですが、みんな正直かつ素直な性格で、学級の児童と関わるたびにとてもいい刺激を受けました。自分の考えを書く時間、鉛筆がなかなか動かない児童にはどのような声掛けをしたらよいのか、手を挙げるのが好きだが当てられないとふてくされる児童にはどのタイミングで当てるのがベストなのか、初めは上手く関わることはできなかった児童に対しても、休み時間での会話を通して少しずつその塩梅がわかるようになってきました。また、係活動や学外活動など何事にも真剣に取り組んでいる様子や、私が授業をした単元の言葉を使って休み時間に話しかけてくれる姿に、4週間という短い期間ながらも児童の成長を感じ、とても感銘を受けました。

そして3つ目、同じ志を持つ教育実習生との出会い。担当学年は違うものの、お互いの授業を見てアドバイスをし合ったり、放課後に今日あった出来事を共有したり、学校現場での初めての経験をともにした仲間がいたことはとても心強かったです。

このような素敵な出会いとともに、たくさんのご経験をさせていただき、とても充実した4週間でした。毎日の授業の計画や放課後の会議、行事ごとの準備など、常に時間に追われているような感覚でしたが、その先に待っていた子どもたちのキラキラした表情が、教師という仕事のやりがいと達成感を与えてくれました。現場にはまだまだ想像もできないような努力があるとは思いますが、子どもたちの成長を感じたときの感動と、教育実習でお世話になった方への感謝を忘れずに、これからは教師になるための勉強に励みたいと思います。

教育実習を終えて

教育学科 3 回生
木村優花

私が教育実習で過ごした1ヶ月はかけがえのない時間でした。実際の教育現場の様子や児童との関わりは新しい発見と学びで溢れていました。そして将来必ず教師になろうと決意しました。

私は第6学年の担当でした。授業は算数の円の面積を1単元と、国語を2回、道徳を1回行いました。クラスの中には塾で発展的な内容を勉強している児童から、基本的な九九や割り算のひっ算、漢字でつまずいている児童まで様々な段階の児童がいました。

実際に児童の前で授業をして、1番実感したことは「授業は児童と一緒に作り上げていくものである」ということです。授業が始まってすぐの私はとにかく授業を進めることに精一杯で、分かりやすいように説明しながら計画通りに進ませないといけないという焦りでいっぱいでした。その時に他学年の先生からある言葉をいただきました。「頑張るのは先生じゃないからなあ。子ども達が頑張るのが良い授業だから。先生は子ども達の頑張りを少し助けてあげるだけ。」この言葉は今でもはっきりと覚えています。

この言葉を聞いてから私は自分が教師中心の授業をしていたことに気付きました。そして自分の中で授業に対する考え方が変わりました。例えば算数で児童に式を発表させるときは、その場で児童に意見を発表させ私が黒板に書くという形から、児童に黒板に式を書かせ、児童自身の言葉で説明させるという形に変えました。さらに児童の意見を教師の言葉でまとめるのではなく、なぜその意見を持ったのか投げ返したり、他の児童に「〇〇さんの考え伝わっているかな？じゃあ〇〇さんの考え方を説明できる？」と問いかけるようにしました。そうすることで児童の中で自分の意見を相手に伝わりやすいようにしようという工夫や、児童の説明に対し他の児童がうなずいたり「同じです」「付けたしがある」とつぶやく姿が見られました。時には私の予想よりも児童の発言から学びが深まる場面もあり、児童の言葉だからこその他の児童に届くこと、そして「児童が主役」の授業を作ることの難しさと楽しさを実感しました。

少しでも子ども達のためにできることはないかと考え続けた1ヶ月でした。いつもはやんちゃでも友達思いだったり、みんなの前で発表することは苦手でも実は負けず嫌いだったり、様々な児童がいたからこそ一人一人と向き合おうと思えました。できることならこの先も子ども達がどのように成長していくのか見届けたいと思うほど、児童への愛情を持つことができました。児童に対してこのような気持ちを持たせたことは、自分は子ども達のために頑張れるという自信に繋がりました。実習最終日に児童が渡してくれた手紙には、「先生の授業は分かりやすくて、とてもおもしろかった。」「算数が好きになりました。」「算数で初めて100点を取れると思います。」という言葉がありました。

児童や授業と向き合うためにたくさん悩み葛藤しました。しかしそれ以上のやりがいと楽しさがありました。この教育実習での経験は教師になりたいという気持ちを後押ししてくれました。今の気持ちを忘れずに将来先生になるために頑張るための力にします。今度子ども達に会う時には本当の先生になりたいと思います。

幼稚園教育実習を終えて

教育学科 4 回生
福 田 萌

今年の幼稚園教育実習は新型コロナウイルスの影響により、8月25日から12月8日までの間で15日間実習を行わせて頂きました。感染対策として実習生は必ずマスクを着用し、子どもとの接触を極力避けるために保育室外からの観察となりました。このような例年とは異なる部分が多かったですが、実習に行かせて頂けたことに非常に感謝しています。

私は3歳児クラスに入らせて頂きました。とても元気な子どもたちで、最初は子どもたちからたくさん声をかけてもらうことが嬉しく、子どもと近くで関わりたい気持ちから距離を取ることが難しく感じました。触れ合うことや一緒に遊ぶことができず、毎回の実習で関わり方を模索していました。その中で、積極的に子どもに近付くことができないため、登園時や子どもから声をかけてくれた際に子どもの目線になって笑顔で応答するなど、一つ一つの関わりを大切にすることを心がけました。そうすることで、登園時に拾ったものを見せて来てくれたり、自由遊びで作ったものを見せてくださったところを教えてくれたりと、感染対策をしながらも子どもの言葉をたくさん聞くことができました。

今回の実習は保育室外からの観察が主だったため、客観的に子どもたちの様子や保育者の援助を観察できたことも大きな学びに繋がりました。実習が始まった8月は、3歳児クラスに進級し、子どもたちの登園が始まってまだ数ヶ月でした。はじめは一人遊びに集中している子どもや教師について行く子どもがよく見られましたが、12月にかけて徐々に子ども同士の関わりが増えたことを見て感じられました。友達と一緒に虫取りをしたり、「楽しいね。」と、気持ちを言葉で共有したりする様子が見られるようになりました。また、今までの自分だったら介入してしまうような子ども同士の関わりを見た際に、外で見守っていたことで、子ども同士で解決しようとする姿を見ることができました。この経験から触れ合いの関わりや一緒に遊ぶことも大切であるが、一歩引いて見守ることで分かる子どもの姿もあるということに気付くことができました。

教師の援助では、子どもの興味・関心に即した保育が展開されていて、活動の繋がりを考慮されていることが分かりました。まず子どもの直近の興味・関心の対象を知るためには、日頃から子どもたちの些細な言葉にも耳を傾け、敏感に察知する必要があると感じました。子どもの提案を取り入れて、してみたいことを実現できるように活動や使う素材を考えて行くことで、子どもの興味・関心に即した保育ができ、子どもたちは主体的に参加できるのだと思いました。また、子どもの提案で遊びが展開する経験をすることで、発想を言葉にして教師や友達に発信する意欲にも繋がると感じました。私は子どものやってみたい気持ちや言葉をしっかり受け止め、保育を展開していくことのできる保育者になれるようこれからも努めていきたいです。

コロナ禍という異例な状況でしたが、私たちの実習を受け入れてくださった神戸女子大学附属高倉台幼稚園の先生方に本当に感謝しています。ありがとうございました。

幼稚園教育実習を終えて

教育学科 4回生

松本翼季

私が幼稚園教諭を目指したのは今からおよそ16年前です。今回、教育実習に行かせていただいた幼稚園で年長だった頃の担任の先生に憧れ、漠然と「先生になりたい!」と思いました。それから小学校、中学、高校、大学と進学し当たり前のように教育学科に入学し免許取得を目指して来ました。そんな私にとって幼稚園教諭は「夢」で、幼稚園実習に行ってはじめて「現実」と向き合ったと言える気がします。

私は初めての幼稚園実習が4回生の秋でした。実習に行くまでに大学で約3年半も幼児教育について勉強する時間がありました。しかし、実習に行くと、日誌や指導案の細かい訂正、指導、何度も何度も書き直しました。さらに、指導案に関しては大学の授業でとても重要と聞いていましたが、実際にどこがどのように重要なのか理解出来ておらず、実習に行き幼児を目の前にして部分実習や一日実習をしてみて、本当に短い5分もないような手遊びでも指導案で幼児の様子や発言を予測しておくだけで、その手遊びを通して伝えたかったこと伝えることができたり、本当にひと手間、一工夫で結果が変わることを実感しました。4週間の実習を通して自分がいかに勉強不足で「夢」と「現実」を混同させていたのかがわかりました。

私は実習を通して「完璧にできなくても笑顔で明るくいる」ということを常に心がけていました。完璧にできなくても、自分にできることを精一杯やることを決めていました。そうしていると、幼児からも「明日は松本先生に頑張って挨拶するんだ」「松本先生に明日はこれをきこう」「松本先生のためにこれを作る」「松本先生とだから一緒にやってみよう」「松本先生と一緒に遊びたい」という風に少しずつ関わろうとしてくれる姿が見られました。また先生方からも「その明るさエネルギーが幼稚園を明るくしている」というようなお言葉や「失敗しても次に繋がるポジティブな言葉にできていること、笑顔を絶やさないことが幼児に良い影響を与えている」というお言葉をいただくことができました。

保育コースと比べ指導案を書いた経験や、模擬保育の経験は少なく実習前、実習中は不安で寝れないことが多く、さらに自分の考えの甘さ気づき、悔しかったり、苦しかったりと涙を流すことがたくさんありました。

しかし、乗り越えた先には本当に「やってよかった」という言葉しか出てこなかったのです。

その時には今までとは違う感動の涙を流すことが出来ました。

私の4年間の大学生活の中で一番充実した4週間でした。

これからの人生大変なことは沢山あると思いますが、学んだことを活かせるようにしたいと思います。

教育実習を終えて

家政学科 4回生

村 上 さやか

私は、3週間の教育実習を経験し、生徒と生活する楽しさや教員のやりがいを感じ改めて教員になりたいという気持ちが強くなりました。実習前は、生徒や教職員の方との関係についての不安や授業をする不安がありました。しかし、実習が始まると生徒や教職員の方との関わりが毎日楽しく、長いと思っていた3週間もあっという間に終わってしまいました。

私は、生徒と関わる中で「個に応じた指導」の大切さを実感しました。私の担当学級は中学2年生でした。明るく元気な生徒が多い学級だったのですぐに打ち解けることができ、休み時間や放課後も沢山コミュニケーションをとることができました。しかし、学級内には支援が必要な生徒が多く、接し方に悩むことが多くありました。指導担当の先生には、毎日打ち合わせ、反省、相談の時間を作っていただき、生徒のことをより知れるよう努力しました。また、一人一人のことを知るために実際に関わる以外に「デイリーライフ」は大切だと実感しました。生徒が書いたことを毎日確認するなかで気になったことは直接話をしました。直接話すことが得意な生徒、文面の方が得意な生徒などさまざまなことを知り、広い視野で生徒の変化に気づくことが出来る教員になりたいと思いました。

また、授業では家庭科の授業と道徳の授業をさせていただきました。私は、家庭科教員として、全員が興味を持って参加できる授業を作りたいと考えていました。しかし、中学生を前に授業をすると使う言葉や説明の仕方が難しく伝わらないことや、自分が予定とは異なる展開になることがよくありました。生徒から出る発言は予想もしてないこともあったので、どんなことでも答えられる教材研究と臨機応変さが必要だと感じました。私は、授業で視覚支援を大切にしました。黒板に表やグラフを拡大したもの、絵やイラストを張りながら授業をすすめました。教具づくりに時間がかかることもあり大変でしたが、授業後に生徒から「分かりやすかった」「来週も楽しみ」と言う生徒の姿から授業ができる喜びやまた次も頑張ろうという活力になりました。

私は、教育実習での経験や出会いは、生涯忘れることのできない大きな財産だと感じています。「生徒を支えられる教員になりたい」と志して教員を目指しました。3週間という短い期間でしたが、生徒から実習最終日に「先生が毎日話聞いてくれたから頑張れた」と言う言葉ももらい、大変だったことは全て忘れられる喜びと教員を目指す気持ちが何倍にも大きくなりました。努力したことすべてが直ぐに報われるとは限りませんが、授業準備や教材研究を頑張った分、私自身の成長にもつながり、生徒だけではなく自分の成長も感じることができました。実習で学んだことを忘れず、4月から中学教員として生徒の成長に寄り添う教員になりたいと思います。

栄養教育実習を終えて

管理栄養士養成課程 4回生

池田花琳

「楽しかったな、充実していたな」と思えた、小学校での1週間の教育実習を終えて、私が感じたことについて2つ述べたいと思います。

1つ目は、食育の授業を実施するにあたって、その準備の大切さを大変強く感じました。授業を実施する上で私の中で立てていた目標は、「みんなが楽しめる授業・わかる授業」でした。その目標を達成するために、指導案の作成においては、「何を伝えたいのか」「どのようにして伝えたらいいのか」ということを、深く考え、1回授業を行うたびに改善を重ねていき、「みんながわかる授業」を追求しました。媒体の作成においては、児童の興味を引き出すような工夫を施したものや、ICTを積極的に取り入れている小学校であったため、パワーポイントを活用し、「みんなが楽しめる授業」を追求しました。しっかりと準備をしていることで、授業では気持ちの余裕ができ、児童の声を積極的に拾いながら授業を展開することが出来ました。また、発表や実演のお手伝いをしてくれた児童を褒めたり、クラス全員で拍手を送ったりすることは、クラスの雰囲気良くなることに気が付きました。このような授業をした結果、児童から「楽しかった」「分かりやすかった」「驚いた」「これから〇〇しようと思った」といった感想をもらえたり、私の実習期間が終わってから授業内容を覚えていてくれて話題に上がったこともあったと、教えていただいたりした時は、とても嬉しく、やりがいを感じる事が出来ました。

2つ目は、アレルギー対応の実際を見て、その対応の仕方にとっても驚きました。1番勉強になったのは、小麦アレルギーを持っている3年生の児童の例でした。長期休暇明けということもあり、完全弁当給食でした。机も教室の1番奥の後ろで、他の子どもたちから距離をとって配置されていました。そして、給食を配膳する時も、その子の周りを出来るだけ通らないように、教室の奥から順に配膳するというルールが設けられていました。また、担任を持っていない先生が一人その教室に入られて、対象児童の周りに給食当番が過度に近づくことが無いか、誤配膳がないか見守られていました。食べる際は、パンは袋の中から出さずにちぎって食べたり、バターが付いている場合はバターをお皿の上に乗せ、お皿の上でバターをつけるように指導していたり、給食ナフキンのたたみ方もパンくずが床に落ちないようにたたみ方にするなど徹底された対策をしていました。恥ずかしながら、「アレルギー対応はしなければならない。でも、どうやって?」ということ、あまり考えたことが無く、現場を見学させてもらうことで初めて具体的に考えることが出来たため、とても印象に残る良い経験になりました。

実習を通して、栄養教諭は担任を持つことが無いため、職員室にすることが多く、栄養教諭の仕事以外の仕事も学校全体を把握しオールマイティーになんでも器用にこなしていく能力の必要性和大変さを感じました。しかし、それ以上に栄養教諭として働くことの満足感、児童と関わることの楽しさを知ることが出来ました。今回の実習で感じた思いや課題を忘れずに、これから子どもたちに幸せと笑顔を届けられる栄養教諭になれるよう、努力していきたいです。

栄養教育実習を終えて

健康スポーツ栄養学科 4回生

増田愛美

中学校での栄養教育実習をさせていただくにあたり、もちろん楽しみな気持ちはあったのですが、それ以上に、思春期真っただ中の生徒たちと上手く関わっていけるのだろうかという不安が多くありました。ですが、事前訪問の際に、栄養教諭の先生や実習担当の先生が「中学生は面白いよ」と口を揃えて言うておられ、楽しみな気持ちが増していきました。実際中学生のみなさんは本当に明るく元気いっぱい、授業になると真剣に取り組むことができる子どもたちばかり、心配していたのが嘘のように楽しい5日間を過ごすことができました。

今回の実習を終えて特に苦労したのが、生徒たちが学びたいと思える授業づくりです。授業となると、教えたい、指導したい、という気持ちが上回ってしまい、主体的な学びを奪ってしまう可能性があることに気づかされました。また、学んでほしいことがあふれてしまい、ねらいが定まらないために、わかりにくい授業になってしまうこととご指摘をいただきました。身につけてほしい力を定め、めあてを絞ると良いというアドバイスをいただき、5日間放課後遅くまでぎっしりご指導していただきました。感想を聞いたときに教師はあくまで、生徒の学びの支援をする立場であることを忘れず、生徒とのやり取りを大切にしながら、主体的に取り組めるような授業づくりの重要性を教わりました。また、食に関する問題は本当に多種多様で、朝食欠食や偏食、やせや肥満など一人一人異なるため、事後指導が大変重要になることも教えていただきました。今回実習では5日間という短い時間でしたので、十分な事後指導を行うことはできませんでしたが、栄養教諭になった際には、授業を行った後も、しっかり見守って支援していこうと思います。

実習期間中、栄養教諭の先生には様々なことを教えて頂き、大変お世話になりました。特に印象的だったのは、栄養教諭としての子どものかかわり方です。栄養教諭は、教諭の中でも子どもと関わる機会が少ない立場であると思っていましたが、休み時間や給食の時間など、限られた時間の中で積極的に生徒たちと関わり、生徒指導にも力を入れておられました。また、職員室内で飛び交う先生同士の他愛無い会話からも生徒の様子を伺い、気づいたことはすぐにメモをとり、生徒理解を深めておられました。生徒たちも、栄養教諭を信頼している様子で、苦手な食べ物に挑戦したことを嬉しそうに報告したり、朝食欠食が目立つ生徒が朝ご飯をちゃんと食べてきたことを報告してくれたり、栄養教諭だから話せることを生徒自身から伝えている場面を多く見かけました。学校栄養職員とは異なる栄養教諭としての生徒とのかかわり方を、5日間栄養教諭の先生のもとで過ごして学ぶことができました。

5日間が本当にあつという間で、最終日にはまだまだここで子どもたちと一緒に学びたいと心から思いました。研究授業やショート指導の準備などやることが盛り沢山で大変なこともた

くさんあった実習でしたが、実習最後の終礼の時に、「今日の学活はどうでしたか？」と決して完璧だったと言えない研究授業の感想を生徒たちにきいたところ、「楽しかったー！」と生徒たちの大きな返事が教室内に響き、考えていた最後の言葉がしゃべられなくなるくらい、嬉しさで涙が止まらなくなったことを今でも覚えています。嬉しくもあり、頼もしくもあり、情けなくもあり、この何とも言えない気持ちは、教育実習をしなければ味わうことができなかつたと思いますし、栄養教諭になりたいという私の意志をさらに強くしました。

コロナウイルスの影響を受け感染対策で大変な中、教員採用試験の前に実習を行いたいという私の希望を受け入れてくださり、ご指導賜りました校長先生をはじめ全ての先生方に感謝申し上げます。お世話になった先生方からいただいた「また一緒に働きましょう」という温かいお言葉を胸に、理想の栄養教諭になれるよう今後も学び続けていきたいです。

養護教育実習を終えて

看護学科 4回生

焼 家 珠 希

今回の養護実習では、小学校という病院とは異なる現場であるため、慣れない場に初めは緊張していましたが、児童の明るい笑顔や、先生たちの優しい声掛けなどのおかげで学ぶだけでなく、楽しく充実した日々を過ごすことが出来ました。3週間を通して、小学校での児童の実態や教育の現場を見る事が出来ました。

実習前半では全学年の授業見学をして、発達段階に応じた授業や児童の授業姿勢を見ることが出来ました。自分が想像するより児童の能力が高く、6年間でこんなに成長するのかと驚きました。先生の研究授業を見学する機会もあり、放課後の協議会にも参加しました。そこで、児童が興味を引くような授業や、児童主体の対話的な授業が理想であることが話し合われており、先生らが多くのことを考えて授業をしていることを感じました。

初めての研究授業は反省点が多かったですが、授業をする楽しさも味わうことができ、またそのクラスに合った授業をするには、普段からの学級経営や指導による児童の学びに対する姿勢を育てることや、日常的にコミュニケーションを積極的に取り、個々の児童理解を深めることが重要であることが経験を通して分かりました。先生と児童は先生が真剣であれば、児童もそれに答えてくれると言う相互作用の関係にあり、一方でそれは良いことだけでなく、教師の姿勢が悪ければ、児童も悪影響を受けるという悪い相互作用が発生する恐れもあることから、教師は児童に影響を与えやすい存在であることを自覚した態度が求められることを学びました。授業や生活指導などすべてが繋がっていることが実習の観察と参加・実践から分かりました。

毎日、養護教諭として保健室でたくさんの経験をさせてもらいました。自分が想像していたよりも忙しく、基本1人の養護教諭は他の先生と協力する必要があると感じました。児童だけでなく、先生たちもよく保健室に来ており、不調の児童を養護教諭に任せっきりにするのではなく、様子を見に来ることで児童に安心感を与えるようにしていたり、児童の状態を保護者に連絡するためでした。他にも、感染対策の消毒の仕方や鼻血の対処方法など簡単なけがの手当の仕方など養護教諭にアドバイスを求めに来る場面や教室での児童の様子を伝える場面が見られました。このことから、養護教諭の健康・保健という専門的な立場または保健室という教室の外からの視点と先生から教室で密に児童を関わっている立場からの視点を統合することで、児童理解を深め、個別対応が必要な児童には個別性のある対応することに繋がっていると考えます。

この養護実習では、養護教諭は責任のある仕事ですが、児童の発育発達に重要な6年間に変わり、間近で見ることが出来るのでとてもやりがいを感じました。看護師も先生・養護教諭も対象者（相手）を理解することが重要であることは同じであるが、看護師に比べ先生はクラス児童、養護教諭は全校生徒と人数が多いことから、すべて児童を平等に理解し、把握することは簡単なことではなく、求められることも多様であると考えます。

臨機応変に対応できるようになるためには、自分の経験や知識がまだまだ足りないため、病院にてそれらを身に付けて、養護教諭の道に進むのもよいと思いました。

観察実習レポート

教育学科 4回生

綱 さやか

1. スクールサポーターとしての活動から得たものについて記述してください。

①児童との関わりから学んだこと

児童との関わりから学んだことは、とにかく児童のことを愛して接すると応じてくれるということがわかった。はじめは、関係を築く上で私の担当の児童が「逃げろー！」と学校中や中庭を走り回ったり、遊具から降りてきてくれないことがあった。最初は話もなかなか通じているかわからないことも多かったが、とにかくその児童の興味関心があること、身につけているもの、顔の調子や散髪をしたかどうか、鬼滅の刃についてなど、細かいことに気を配り声をかけまくった。そうすると、自分の話すことだけでなく私の話すことにも、たくさん興味をもってくれた。とにかく子どもたちが可愛くて、愛情を持って接していくうちに向こうから毎回走ってよってきてくれるようになった。さらに、私と一緒に進んで学習に向かいたいと言うようになり学習にも積極的になることができるようになった。

②教師との関わりから学んだこと

担当学年が1年生ということもあり、できる限り担任の先生は怒らないようにしているように感じました。本当にだめなときは真剣に叱りますが、ほとんどは叱るのではなく自分たちで気づかせるようにしていました。

また、1年生は自分のことを話したい子が多く、そしてたくさんの児童が一斉に話しかけてきます。一人一人に反応していたらきりがないのである程度「すごいね！そうなんだ！」と大きめなりアクションをとって児童を満足させているようにみえました。

③学校という組織との関わりから学んだこと

私の担当している児童は小学校の中で今一番気にかけてあげたい児童です。そのような情報を職員室で共有しており、その児童が校内で一人で歩いているときは声をかけてくださる先生が多かったり、その児童が外カードをもらって中庭に遊びに行っているときは、職員室から手の空いている先生が見守ってくださっていました。

このように、担任の先生だけでなく、学校として子どもたちを支えていくことで子どもも保護者も安心した環境作りができるのではないかと学びました。

2. 特別支援教育、学級経営、教材研究のいずれかに的を絞って貴女が小学校で学んだことを記述してください。

教員採用試験や友人の卒論を通して今までよりも学級経営に興味を持った。

特にスクールサポーターで考察したことは席替えについてである。私の担当学級には支援を必要としている児童が2名いる。その2名はお互いの影響を受けやすく、特に「あの子は勉強してないのになんで俺もやらなあかんねん！」というような悪い影響を受けやすい。このことから、先生は意図的に席を絶対している。はじめに、該当の2名は教室の端と端というような

対角線に設定されている。さらに、該当の児童の周りの児童については、おとなしい児童であったり、世話好きな児童、優しい児童が配置されているように感じた。席が決まると一度児童たちを該当の席に座らせてみていたのだが、その際に該当の児童が少しでも周りの児童にちょっかいをかけていたりすることがあれば、違う児童と交代するというようにしていた。

これらのことから、該当の児童は刺激が少なく自分のやりたいことに集中できる機会が増えたように感じる。また、一名の児童に関しては1番前の席であるため教師の手が届きやすいだけでなく、他の児童が視野に入らず、より快適に過ごせているように感じる。

また、その他にもかなりマイペースな児童や学力が少し気になる児童に関しては前の方の席、かなり自立が進んでいる児童については、後ろの方の席になっているように感じた。

3. 将来教師になったときこのスクールサポーターとしての経験をどう教育活動に生かしますか？

特に児童との関わり、信頼関係を築く上で生かしていきたい。児童の興味・関心のあるもの、身に付けているものについてどんどん積極的に愛情をもって話しかける。そして今のように休み時間は児童と話したり遊んだりして、少しでも児童とかかわる時間を増やしていく。このようにしてどんどん信頼関係を築き叱ってもちゃんと伝わるようにしていきたい。

さらに、そこで見つけた興味・関心のある内容を授業に取り入れて、児童がもっと知りたい、もっと学びたいと思えるような授業作りに励んでいきたいと思います。

4. スクールサポーターの活動と学業の両立の困難点、課題、またスクールサポーターというシステムの課題について記述してください。改善点・アドバイスがあれば記述してください。

私は小学校が私の卒論の進捗や学校生活、教員採用試験についてとても気を遣ってくださり、簡単にお休みをいただくことができたので課題は見当たりませんでした。

さらによく声もかけてくださり、寄り添ってくださったので関わりやすかったです。

5. 2. 3回生は来年もスクールサポーターに応募しますか？しませんか？またその理由を記述してください。4回生は下級生にスクールサポーターを勧めますか？勧めませんか？またその理由を記述してください。

私の配属校の校長先生と教頭先生はとても優しく、私のスケジュールをいつも優先して日程を組んでくださった。また、週に一回でも子どもたちと関わる機会があることで、模擬授業をするときにイメージを掴みやすい、とっっっても子どもたちから元気をもらえる、笑顔をももらえる、といった利点がある。

そして何よりもよかったことは、教員採用試験の面接で経験したことを使えるということである。面接ではスクールサポーターの活動について興味を持ってもらえる。さらに、模擬授業においても、自分の親しい児童たちを想像して授業ができることから、より面白く、よりわかりやすく、より興味をもってもらえるにはどうしたらいいか、というのがわかるようになる。

2回生からボランティアでずっと行ってましたが、1日も無駄だと思った日はありませんでした！おかげで兵庫県、岡山県、鳥取県、香川県、高知県の教員採用試験に合格することができ

ました！！少しでも迷っていたら絶対に参加するべきです！！！！

6. サポーター小学校の出来事で一番印象に残っていることを記述してください。

クラスの児童や担当の児童と信頼関係を築けたことが大きな思い出です。そこで、本気で児童に対して初めて怒ったことです。担当の2名の児童を取り出しで放送室で私1人で2人を指導しているとき、たたき合いの喧嘩が勃発してしまいました。はじめは、「やめなさい」と注意を行っていましたが2人ともヒートアップしていて声が届きませんでした。そこで私は「いい加減にしなさい」と声質を変え真剣な顔で大きな声で怒りました。なぜ人をたたいてはいけないのか、喧嘩の原因は何なのか、仲直りすることはできるのか、など真剣に話し合いました。教育実習でもできなかった初めての怒るということであったので嫌われてしまわないか不安でしたが、後日児童からは「先生は炭次郎みたいに真剣な目で怒るからかっこよかったよ」と言ってもらえた上にしっかり私の怒った意味も理解してくれていました。初めての怒るという指導でしたが児童との信頼関係を築き愛情を持って叱ればちゃんと伝わるとわかって自信につながり、私の大きな学びになりました。

7. その他、特別支援、学級経営、スクールサポーターについて何かあれば自由に記述してください。

このスクールサポーターに行った3年間を通して、通常学級、特別支援学級など様々なクラスや学年を担当してきました。そんな中で私は必ずどの児童にも愛情を持って接することを忘れませんでした。おかげで今では小学校に校門から入った瞬間から子どもたちが寄ってきてくれたり、話しかけてくれるようになりました。全学年の全児童と仲良くなることができました。小学校の児童と離れることはとてつもなく悲しいですが、教員になってからも、このことを忘れず、小学校の全児童と仲良くなれるように、愛情をもって子どもたちのことを一番に考えることのできる教員になります。

4年間お世話になりありがとうございました。

観察実習レポート

教育学科 4回生

大浦 早織

1. スクールサポーターとしての活動から得たものについて記述してください。

①児童との関わりから学んだこと

子どもの興味を知っておくことの大切さを学びました。今年であれば、鬼滅の刃に出てくる鬼を使って、鬼を倒すために九九の修業をすると設定したことがありました。カードを持ち、休み時間も教師を探し歩いて修行をしている姿がありました。覚えることが苦手な子についていた時には、わたしの顔を見ると、「先生、ここまで進んだよ！」と声を掛けてくれることもありました。子どもの興味の向いている方向を知り、関わっていくことは大切なことだと改めて気づかされました。

②教師との関わりから学んだこと

よく入らせていただいた学年の先生に初めてお会いした時、「子どもとの距離が丁度良くて、さすがサポーター慣れしてるなと思った。」と言っていました。ローマ字入力のでパソコンを使う授業に入らせていただいた時には、「見えている範囲が広くて気が利いて、いつでも担任できるんちがう？」と声を掛けていただいたこともありました。お声がけいただいた内容も嬉しかったのですが、それ以上に子どもだけでなく私たちサポーターまで見ることができる視野はすごいなと考えさせられました。

③学校という組織との関わりから学んだこと

担任の先生が体調不良による長期の入院をされたことがありました。学年単学級の小規模校ということもあり、教科指導の先生が代わりに担任として入られていました。しかし、他学年の授業も担当しておられたため、学年担任の先生や特別支援学級の先生が教科を分担して入られていたのを見ました。学校という大きな組織であり、なおかつ小規模校で子どもと教師がお互いの顔を知っていたからこそできた事ではないかなと思いました。

2. 特別支援教育、学級経営、教材研究のいずれかに的を絞って貴女が小学校で学んだことを記述してください。

教材研究の大切さです。休養されていた間に特別支援学級の先生が国語の授業を単元ごと担当されていました。3年生でしたが、子どもの感想に難しかったや楽しかったという表記が多いことをご存じだったため、班活動での意思決定の単元では使えるワードを全体で挙げていき、子ども個人で作文を書く時間に入ってらっしゃいました。単元を通しての見通しを持っていないとできない授業だなと思いました。授業の内容では班ごとに絵本を選び、1年生に読む「絵本の会」をするにあたっての準備や練習でした。本を決めるところから班で行い、読み方や担当するところなどを決めていくところからでした。各班に班長、書記、タイムキーパーを設け、仕事があることでできたことなども内容として盛り込まれていました。

3. 将来教師になったときこのスクールサポーターとしての経験をどう教育活動に生かしますか？

教室の掲示物を真似して、自分なりにアレンジしていきたいと思います。各学年入らせていただきましたが、教室後ろにある掲示によって教室の雰囲気が大きく違っていました。落ち着いているクラスは掲示がすっきりしていたり、元気なクラスは行事や授業の写真が多かったりと先生のカラーや子どものキャラと同じぐらい、教室の空気を支配するものなのだなと思いました。

4. スクールサポーターの活動と学業の両立の困難点、課題、またスクールサポーターというシステムの課題について記述してください。改善点・アドバイスがあれば記述してください。特にないです。

5. 2. 3回生は来年もスクールサポーターに応募しますか？しませんか？またその理由を記述してください。4回生は下級生にスクールサポーターを勧めますか？勧めませんか？またその理由を記述してください。

私は勧めたいと思います。学校のサポート体制にもよりますが、各学年に入れること、多くの先生の授業を見ることができること、子どもの反応をより近くで感じられることが大きいと思います。様々な学年に入ることで、その学年での発達段階や授業の内容や進度を知ることができます。多くの先生の授業を見せていただくことで、授業の展開の仕方や子どもの指名方法、学級経営を学ぶことができます。お話させていただくことで、経験を教えてくださったり、子どもの成長を教えてくださったりしました。継続して同じ学校に行けば、子どもの成長を長期間見することもできます。個人個人の成長、学年としての成長、先生が代わるだけでこんなにも子どもは代わるんだなということを感じさせられます。

自分に合ったタイプを見つけることもできるので、私はお勧めしたいと思います。

6. サポーター小学校の出来事で一番印象に残っていることを記述してください。

学習発表会のお手伝いをさせていただけたことです。コロナという状況の中でも合奏をし、各学年の学習の成果を発表しました。本番までもたくさん入らせていただき、前日には各学年の最終リハーサルにも立ち合わせていただき、用具の出し入れのタイミングや位置の確認をさせていただきました。当日もお客さんとしてではなく運営する側として参加させていただき、用具のセッティングや入れ替えの間に準備を経験させていただきました。見ていることは簡単ですが、実際に中に入れていただいたことで、自分が現場に出たときにある仕事を体験させていただきました。もちろん、子どもたちも練習していたこと以上の力を発揮し、今年できるようになったことを保護者の皆さんの前で発表することができていました。

7. その他、特別支援、学級経営、スクールサポーターについて何かあれば自由に記述してください。

特にないです。

観察実習レポート

教育学科 4回生

福井 千夏

1. スクールサポーターとしての活動から得たものについて記述してください。

①児童との関わりから学んだこと

児童との関わりから、コロナがあり、学校がなかった期間を経て、「学校は友達と一緒に学び成長する場」ということを学ぶことができました。子どもたちの、元気な気持ちの良い挨拶、一生懸命に九九カードを持ち寄って暗唱する姿、休み時間に運動場で思いっきり体を動かし走り回る姿に、子どもたちにとって、学校は学習と遊びの学びの場であることを実感しました。

②教師との関わりから学んだこと

教師との関わりから、コロナ対策などの感染症予防を徹底して行いつつ、子どもたちの学びを大切に、これまでとは違う工夫をしていながら、授業づくりや行事を開催することが大切であることを学ぶことができました。また、特別な支援を必要とする児童への手立てや、声掛け、支援方法など、一人ひとりの子どもに寄り添うことはこれまで通り大切であることも学ぶことができました。

③学校という組織との関わりから学んだこと

学校という組織の関わりから、子どもたちにとって学校が安全な場所、学びの場所、成長する場所であることを教職員同士が確認し合い、子どもたちの様子を学校便りやホームページから発信し、子どもはもちろん、保護者の方や地域の方とのつながりを大切にしていることを学ぶことができました。また、チーム学校という意識を先生方から、強く感じることができました。

2. 特別支援教育、学級経営、教材研究のいずれかに的を絞って貴女が小学校で学んだことを記述してください。

学級経営の視点での学びがあった。今年度は、コロナ対策の影響で学校の衛生管理や安全がとても重要視されていると活動中から感じた。換気の徹底や、音楽の時間の前後の手洗い消毒、毎朝の健康チェックカードの点検と児童の健康状態観察など、子どもたち一人ひとりの様子を担任が定期的に把握し、常に感染症対策を心がけていることを感じた。学級の子どもたちの安全を、学級担任をはじめ学校の全職員で守るように努めていると感じることもできた。また、学級経営において大切になる座席配置にも学びを得ることができた。子どもたち一人ひとりの学習理解到達状況や、学びの意欲は異なる。それぞれの学級の子どもたちもコロナ禍で、学習に不安を抱えている児童も少なくはないと考える。そこで、担任が学習理解度や、不安を抱えている児童を日常的に把握し、担任の目につきやすく支援をしやすい位置や、落ち着いて取り組むことができるように席を配置することで、学級内のすべての児童が授業に集中できるような取り組みがされていると学んだ。

3. 将来教師になったときこのスクールサポーターとしての経験をどう教育活動に生かしますか？

このスクールサポーター活動での経験は、子どもとの関わり方を中心に、私になりたい「信頼される教師」「寄り添う教師」へと教育活動へ生かしていきたいと考える。子どもたちの学習支援や補助では、子どもに考え方や解き方の方法のみを教えるのではなく、子どもの考え方や意見を大切にしながら子どもの「できた」「頑張った」を大切にすることを学んだ。また、朝の挨拶運動や、休み時間の様子など、常に子どもの様子を日頃から観察し、子どもとの会話ややり取りから、子どもたちが発信する SOS など信号を発見し早期解決していきたいと考える。そして、子どもはもちろん保護者や地域の方との関係も密に連携できるようにしたい。子どもたちの下校後も、職員室ではそれぞれの学級の担任の先生方が、子どもたちの様子や、小さなことでも気になったことは、その日のうちに保護者の方に電話で連絡する姿をよく見た。保護者に、学校への信頼と安心を持っていただけるように、保護者対応も怠わずに取り組みたい。地域の方とは、放課後子ども教室を通して、学校の様子や子どもたちの学習進度状況などを知ってもらい、学校を積極的に開放することで、地域の方と一緒に、子どもたちの学びを支えていきたいと考える。

4. スクールサポーターの活動と学業の両立の困難点、課題、またスクールサポーターというシステムの課題について記述してください。改善点・アドバイスがあれば記述してください。

スクールサポーターの活動での困難点は特になかった。今年は特に、活動開始も例年に比べて遅かったが、小学校側もいつでも活動を快く引き受けて下さった。また、課題としては、大学側で活動報告交流会などの機会を設けてもいいのではないかと感じた。同じ小学校で活動しているスクールサポーター同士で日々の活動や、活動中に困ったことや対応の仕方など、様々な情報を共有することで、より配置校の児童や先生方との関わりを、広い視点で考えることができ、その後の活動の参考になると考える。

5. 2. 3 回生は来年もスクールサポーターに応募しますか？しませんか？またその理由を記述してください。4 回生は下級生にスクールサポーターを勧めますか？勧めませんか？またその理由を記述してください。

ぜひ下級生にスクールサポーターを勧めたいです。このスクールサポーター活動を通して、大学の講義で学んだことを生かし、実際の学校現場で子どもとの関わりを通して、ただぼんやりと「先生になりたい」という夢や憧れから「絶対に先生になる」という強い気持ちをもつことができました。

また、子どもたちの成長や、子どもたちの日々の発見は、私自身の予想をはるかに超えることが多く、子どもたちから教えてもらうことがたくさんありました。できないことをできるようになるまで全力で取り組むこと、毎日元気いっぱい友達と仲良く過ごすこと、友達のよさを認めたくさんよいところを見つけるなど、子どもたちは私たち大人が思っている以上に、一生懸命ということを実感しました。また、私自身、学校という組織で活動することの責任と自覚をもつこともできたと感じます。常に子どもたちにとっては、大学生ではなく一人の先生として見られていることから、一つ一つの発言や行動に責任をとるように心がけることができま

した。また、子どもたちは担任の先生や学校の先生に話しにくいことや少しの悩みも、私たちスクールサポーターにだからこそ話をしてくれることもありました。これは、子どもと本気で向き合うことのできる時間だと感じます。また、教育実習や教員採用試験など、スクールサポーターの経験が、これからの私たちの活動への支えと励みになると考えます。

6. サポーター小学校の出来事で一番印象に残っていることを記述してください。

今年度のスクールサポーター活動で一番印象に残っていることは、6年生の総合の時間での「卒業に向けて」である。昨年度はコロナ感染症対策として、卒業式での在校生の参加がなかった。そのため、例年通りの卒業式ができず、なかなか卒業式のイメージが現在の6年生にとっては定着しにくいと考えた先生方が、昨年卒業式の動画を編集し、卒業という意味について考える時間を設けた。それは、とても私自身心に響いた。この動画を見る前後で子どもたちの発言に大きな変化があったからだ。寂しい、別れの場、新しい道などマイナスのイメージがありがちだったが、動画を見た後は、引き継ぐ場、感謝、恩返しなど、卒業の意味を今の自分自身と向き合って考える発言があったからだ。このように、小学校生活の中で最後の大切な行事であること、自分たちが見せたい姿、伝えたい思いを表現できる卒業式に向けて考える時間は一番印象に残っている。

7. その他、特別支援、学級経営、スクールサポーターについて何かあれば自由に記述してください。

この3年間、神戸市でスクールサポーター活動をし、たくさんの学びや宝物になる時間を得ることができました。本当にありがとうございました。

観察実習レポート

家政学科 4回生

鶴野芽依

1. スクールサポーターとしての活動から得られたものについて記述してください。

① 生徒との関りから学んだこと

生徒に自ら積極的に声をかける大切さについて学びました。私たちスクールサポーターは週に数回しか学校へ行きません。中学生の多くは「誰だ？時々やってくるこの人は。」と、良くわからない先生と捉えていたように思います。最初は学校現場へ入るだけで緊張してしまい、しどろもどろになっていましたが、とにかく小さなことでも声をかけるように意識しました。そうすると生徒らからみて、私の人物像が何となくイメージできるようになったのか壁を感じにくくなり、2年目の今では生徒が日常生活で感じていることを私に話してくれるようになりました。生徒とコミュニケーションをとることの大切さを実感することができました。

② 教師との関りから学んだこと

メリハリのある態度で生徒に接することが大切だと学びました。私は生徒らには悩みや相談事などなんでも気軽に話すことができる先生を目指したいと考えていました。なので、LHRなどの自習の時間の監督を任されたときにも生徒らの反応に対して自習に関係のあることにもないことにも反応していました。自分自身はみんなのこと見ているという合図のつもりでしていましたが、次第に指示が通りにくくなり、自分のやっていることは適切ではないと思い始めました。そこで、現場の先生方はどのように生徒と関わって信頼関係を構築しているのか観察しました。すると、授業中など全体をまとめるときは厳しめに、5人以下ほどの少人数のときはフランクに接していると感じました。生徒に威圧感を与えては教師との信頼関係を築きにくいし、友達のような先生は全体をまとめるうえで支障が出るので、メリハリが大事なのだと学ぶことができました。

③ 学校という組織との関りから学んだこと

情報の共有の大切さを学びました。職員朝礼では、学年を問わず全学年の先生に対して〇くんはこんな事情があるのでこんな配慮が必要です。お知りおきください。などと情報の共有を行っていました。私はそれがあまりにも細かいのでとても驚きました。情報共有は自分が考える以上に大切なことであり、教師になってからも細かなことでも誰かに伝えるということを意識したいと思いました。

2. 特別支援教育、学級経営、教材研究のいずれかに的を絞って貴女が中学校で学んだことを記述してください。

「特別支援教育」

この冬、私がスクールサポーターとして活動している中学校に転校生がやってきました。ネパールから来た男の子です。その男の子は日本語を話すことができないので、通常の授業には

参加せずに別室で私たちスクールサポーターと日本語の勉強をすることになりました。私も男の子も相手が何を伝えようとしているのかわからないので混乱状態でした。それでもどうにかジェスチャーや表情で伝えようと奮起していました。最近では私たちの一生懸命さが伝わったのか男の子も笑顔で返してくれます。あきらめずに生徒と向き合うことの大切さを学んだような気がします。

3. 将来教師になったときこのスクールサポーターとしての経験をどう教育活動にいかしますか？

スクールサポーター活動では様々な教科の先生の授業を見学することができます。生徒が興味を示す話題や教具の特徴、話し方など真似したいと思いました。

4. スクールサポーターの活動と学業の両立の困難点、課題、またスクールサポーターというシステムの課題について記述してください。改善点・アドバイスがあれば記述してください。

特にありません。

5. 2・3回生は来年もスクールサポーターに応募しますか？しませんか？またその理由を記述してください。4回生は下級生にスクールサポーターを勧めますか？勧めませんか？またその理由を記述してください。

下級生に勧めたいと思います。私は教員採用試験中や教育実習前などスクールサポーターとして行っている中学校の生徒らに支えられていました。「先生はきっといい先生になれるよ。」なんて言ってもらおうと早く先生になりたいなと感じ、厳しい試験や実習も乗り越えることができました。教員を目指す人は、学校現場で本当に自分は仕事をしていきたいのかを確かめる場として活用するのもいいと思います。

6. サポーター中学校の出来事で一番印象に残っていることを記述してください。

私は昨年度の合唱コンクールが一番印象に残っています。いつも立ち歩いたりおしゃべりしていたりする生徒らがクラス一丸となって練習に励み、ステージに立って素敵な歌声を大勢の前で披露する姿に感動しました。生徒らの成長過程を間近で観察でき、教師のやりがいを感じることができました。

7. その他、特別支援、学級経営、スクールサポーターについて何かあれば自由に記述してください。

私は二年間スクールサポーター活動をしてきました。大学からの課題も多く両立が厳しいときもありましたが、やってよかったなと思っています。教育についてもっと追求したい新たな発見や自分自身の課題についても気づきがありました。この気づきを教員生活において生かせるように残りの大学生活を充実したものにしていきたいです。

生徒との関り方がわからず、困っていた時に相談に乗ってくださった教職支援センターの先生方、お忙しい中あたたかく私を迎え入れてくださった中学校の先生方には感謝でいっぱいです。ありがとうございました。